

目次

ごあいさつ ..... 3

目次 ..... 8

謝辞 ..... 9

凡例 ..... 10

館蔵の考古出土品 ..... 11

館蔵の板碑 ..... 44

館蔵の古文書 ..... 47

大場代官家所蔵の書画 ..... 61

館蔵の書画 ..... 83

館蔵の錦絵・版画 ..... 187

世田谷区立郷土資料館展覧会年表 ..... 215

出品目録 ..... 242

主要参考文献 ..... 248

ポロ市通りへ2014分間延繪図 ..... 250

謝辞

都内で最初の公立地域博物館として、当館が産声を上げてから、はや、五十年という歳月が流れました。その間、地域の皆様、ならびに区外の方々からも暖かいご支援とご愛顧を賜り、職員一同、それを励みに博物館活動を続けて参りました。殊に六百余名の方々からは、貴重な文化財のご寄贈・ご寄託をいただき、誠にありがたく存じます。本来でしたら、そのお一人お一人のご芳名をここに記して謝意を表すべきところではありますが、紙面の都合上、謝辞のみにて失礼申し上げます。

これからも、なお一層の充実をはかるとともに、皆様に愛され続ける地域博物館を目指し、邁進してまいりますので、変わらぬご支援・ご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

また、本展覧会の開催及び本図録の作成に際しまして、左記の方々、機関のご指導・ご協力を賜りました。ここにご芳名を記し深く感謝致します。

(五十音順・敬称略)

- |           |       |
|-----------|-------|
| 飯田恭次      | 鈴木美保  |
| 池上博之      | 田中重義  |
| 池澤一郎      | 立木望隆  |
| 石井至邦      | 長崎玲子  |
| 宇津木清      | 西山忠雄  |
| 大場代官屋敷保存会 | 橋場万里子 |
| 大場信秀      | 濱克洋   |
| 木村圭子      | 丸川房子  |
| 豪徳寺       | 森本隆史  |
| 佐藤史人      | 山崎久登  |
| 鈴木達       | 山本俊一  |

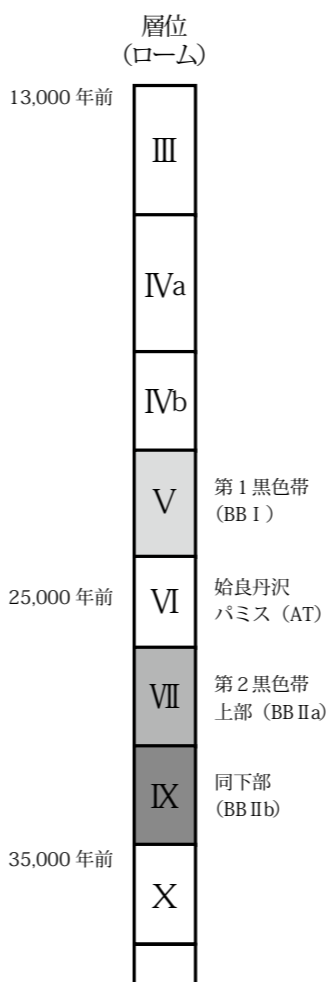


1 小型石器  
 下山遺跡  
 X層（最古期文化層）  
 左二点削器、中央楔形石器、右錐状石器

現在認知されている日本最古の石器文化は、今からおおよそ三五〇〇〇年前のものである。当時の環境は、ごく寒冷な最終氷期（ヴュルム氷期中頃）にあたり、絶滅したマンモス・ナウマンゾウ・ヤベオオツノジカなどの大型動物が生息していた。南関東地域では、立川ローム層底部近くのX層付近から出土する石器群が、その年代に相当し、これまでに七〇ヶ所以上の遺跡で確認されている。

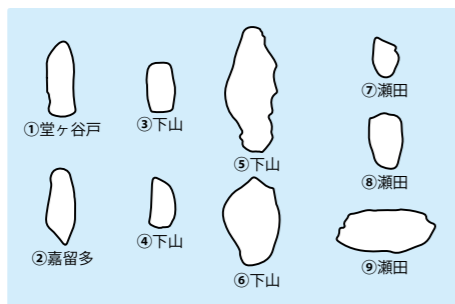
世田谷では、いずれも国分寺崖線縁にある嘉留多（成城一丁目）・堂ヶ谷戸（岡本一丁目）・下山（瀬田四丁目）・瀬田（瀬田一丁目）の四遺跡で該期の石器群が確認されている。これらの遺跡では、剥片に加工を施したナイフ形石器やスクレイパーなどの小型の剥片石器とともに、礫そのものを使用した敲石や台石、そして石斧（斧形石器とも）などの大型石器を伴うことが知られている。

ここでは、資料に恵まれた下山・瀬田の二遺跡を中心に取り上げ、特に該期を特徴づける石斧製作と石刃技法に焦点を当てて、日本列島最古とされる石器文化の一端を紹介する。



2 小型石刃器  
 下山遺跡  
 瀬田遺跡  
 嘉留多遺跡  
 堂ヶ谷戸遺跡  
 X層（最古期文化層）

左下のみ石刃(②)、他はナイフ形石器(①③④⑤)と台形様石器(⑥⑦⑧)、右下石核(⑨)



最古期の石刃技法について

石刃技法とは、元となる石塊から、左右の両側縁が平行する縦長剥片（石刃）を効率よく連続的に剥出する技法であり、後期旧石器時代には汎世界的に見られる技法である（15頁解説参照）。これによって生まれた石刃は、ナイフ形石器やスクレイパーなど小型石器の主要な素材となる。

日本最古期の石器群には、石斧や台石・敲石などの大型石器とともに、小型石器を伴うことが知られているが、これらの小型石器が、当初から石刃技法によるものであるか否かについては見解が分かれる。世田谷の例についてみると、石器の出土層準ではほとんど差異の認められない下山遺跡および瀬田遺跡のX層（最古期文化層）において、前者には石刃技法の存在がきわめて顕著に認められるのに対し、後者にはその徴候を見出せないという違いがある。これを時期差と見るか、居住様態の違いと解するかは、今しばらく議論の必要などところである。

ここでは、石刃技法の存否をめぐって、対照的なあり方を見せる右掲二遺跡を中心に、X層の石器と剥片剥離技術をとりあげる。

写真①～⑤は、石刃を素材としたナイフ形石器と石刃。⑥～⑧は、いずれも台形様石器で、横長剥片を素材としている。瀬田遺跡X層文化層では、剥片剥離関連の接合資料も多数出土しているが、石刃や石刃技法の存在を裏付けるような資料は確認されない。同遺跡の台形様石器(⑧)と接合する石核(⑨)の場合も、小型の礫を素材とし、まったく調整を加えることなく、自然面（礫面）を打面として台形様石器の素材となった横長剥片を得ている。

## 世田谷の縄文土器

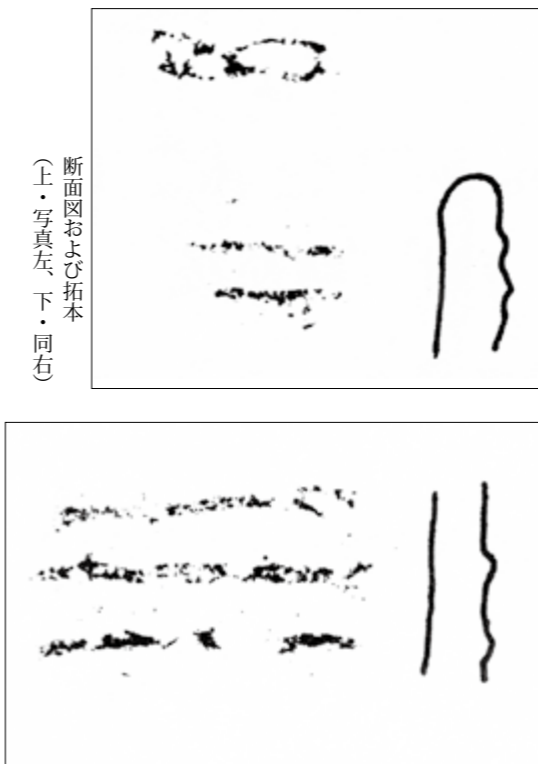
都下二三区で最多の遺跡数をほこる世田谷区では、三〇ヶ所を超える遺跡のうち、その約半数で縄文時代遺跡の存在が想定されている。草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六期区分される縄文時代の中で、草創期と晩期にあつては、いまだに明確な生活址が発見されていないが（土器片や石器などの遺物は見つかっている）、他の時期においては、複数の住居からなる集落の存在が確認されている。最近では、平成十七年に行われた桜木遺跡（桜一丁目）の初の調査で、一挙に三五〇軒以上の住居跡が発見され、同遺跡が、都下最大級の集落遺跡として話題を集めたのは記憶に新しい。

ここでは、世田谷各地の遺跡から出土した縄文土器を紹介する。



16 鉢（口縁部付近破片）  
根津山遺跡（代田四丁目）  
草創期 隆線文系土器

草創期に帰属する遺構はまだ区内で見つかっていないが、土器破片だけが遺物包含層（遺物を含む層）から出土している。幅四mm前後の丸いへら状工具を横位に押し引きし、はみ出た高さ二mm、幅二mmの微隆線が施文される。器厚が薄く、焼成は良好である。本例は、ハの字形爪形文土器に先行する隆線文系土器に属する世田谷最古の縄文土器である。



断面図および拓本  
（上・写真左、下・同右）



17

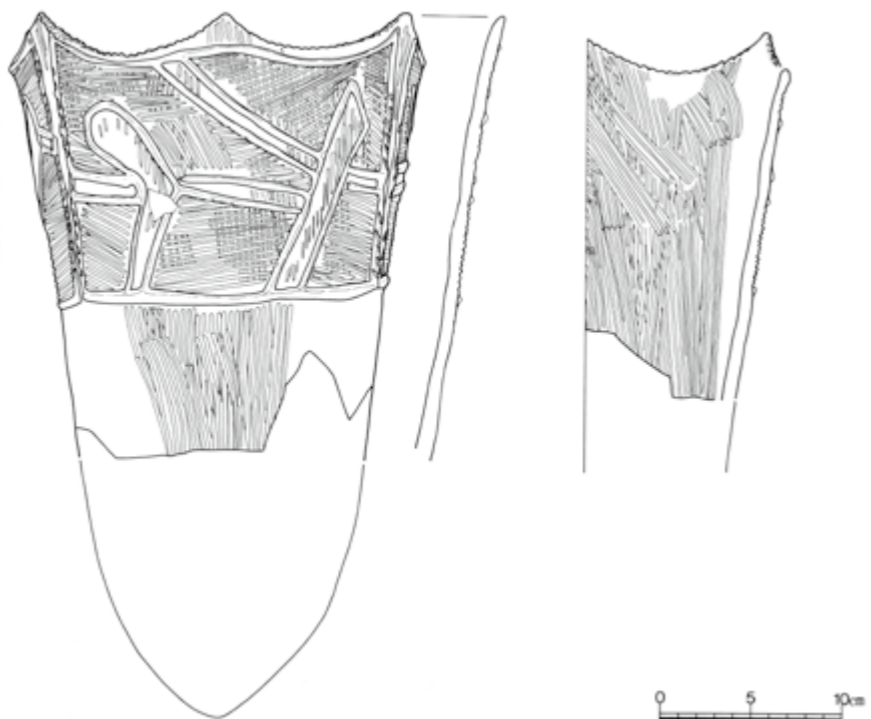
深鉢

堂ヶ谷戸遺跡（岡本三丁目）

早期 野島式

口径二四・〇cm 現存高二四・五cm

早期後半になると、サルボウやアカガイなどの二枚貝を用いて貝殻条痕を施す手法が広く行われた。本品には内外面とも貝殻条痕が施される。口縁は六単位の波状を呈し、口唇部に刻みを有する。上半部の文様帯は、太い隆起線によって、三分割され、中にはやはり隆起線文による区画状文がある。胎土には砂粒を含んでいる。胴部以下を欠損するが、本来底部は尖底ないしは丸底を呈する。炬穴出土。





## 館蔵の板碑

板碑は、鎌倉時代前期から造られはじめ、江戸時代を迎える頃までにはほぼ消滅した石造の供養塔婆である。死者の菩提を弔う追善供養、また、願主が生前に死後の冥福を祈って行う逆修供養等のため造立されたが、墓塔として用いられることもあった。全国的に分布し、その石材も区々だが、関東では荒川上流域（長瀬・小川町など）で産する緑泥片岩を多用している。形状は薄い板状で、山形の頂と二条線を有す頭部、供養対象である本尊等の図様や種子（梵字）、名号、題目、さらには造立願文や偈、紀年、法号などを配した身部、起立のため台石等に差し込む基部で構成される、いわゆる武蔵型板碑がその典型とされる。造立者は、当初僧侶や地方豪族であったが、時代の下降とともに庶民階層へも広まってきた。



世田谷区では、区内の出土・伝世品や亡失品、他からの移入品を含めると、これまでに三〇〇基以上の板碑が確認されている。このうち、当資料館には、断片状のものも含めると、現在一一〇基を超える板碑が収納されている。大きさは、全長一mに満たない比較的小型のものが大半を占め、その多くは阿弥陀如来を主尊とする種子板碑である。中世の遺物にあまり恵まれていない世田谷にあって、板碑は、地域の動静や人々の信仰の形など、この時期の貴重な情報を我々に提供してくれる資料価値の高い文化遺産なのである。なお、区内の板碑については、『世田谷区石造遺物調査報告書Ⅰ 世田谷区現存板碑集成』（世田谷区教育委員会 一九八四）に詳しく記されている。

### 37 阿弥陀一尊種子板碑

明徳二年（一三九一）  
緑泥片岩製  
高九七・五cm×幅二九・〇cm×厚三・五cm

#### 【刻銘】

（光明真言）  
妙蓮  
キリーク（蓮台・月輪） 明徳二年辛未六月廿八日  
禪尼  
（光明真言）

もと烏山念仏堂（南烏山二丁目）墓地に置かれてあった六点のうちの一つ。これらは、昭和五、六年頃烏山神社南付近の字泉澤寺から出土したものである。上部側面など数ヶ所に破損があるものの、制作当初の形状はよくとどめている。身部の中央上部に、月輪を伴った阿弥陀如来の主尊種子が蓮台の上に配されているが、丁寧かつ整った彫りでなかなか美しい。その斜め下方には光明真言が二行に分けて梵字で表されている。真言とは、仏菩薩等が発す偽りのない真実のことばであり、長文が陀羅尼（大呪）、短文を真言（小呪）という。種々ある真言のうち、板碑には、光明真言が多くみられる。なお、泉澤寺は、延徳三年（一四九一）に吉良頼高の菩提所として創建されたとみられる寺院であり、それより一世紀も遡る紀年を有す本板碑は、この地域の歴史を検討していく上で、注意を要する遺物の一つである。

#### 【刻銘】

（随求真言）  
長祿二年  
サ（蓮台・月輪）  
（随求真言）  
キリーク（蓮台・月輪状光明真言）  
性空禪門 戊寅  
（随求真言）  
サク（蓮台・月輪）  
（随求真言）  
五月廿二日

基部を欠くが、本体部分はほぼ完形である。阿弥陀如来及び観音・勢至菩薩の三尊を種子で表すが、主尊種子（阿弥陀）には梵字の光明真言が月輪状に配されている。また、両脇侍種子の下方に随求真言（小呪）を四行に分けて表しているが、これは区内の他の板碑中に例がなく珍しい。本板碑は、区内成城四丁目の個人宅にあったものだが、その伝来は不明。近くの中神社付近（成城三丁目）から、かつて多数の板碑が出土していることから、この板碑もその地より出土したものではないかとの指摘もある。

#### 【刻銘】

パン（蓮台） 弘安元年四月日

区内では珍しい大日如来の種子一尊で構成される板碑（種子の「パン」は金剛界大日を示す）。表面の摩滅はやや目立つが、ほぼ完形を保っている。弘安元年（一二七八）の紀年は、いまのところ区内最古となる。また、堂ヶ谷戸遺跡（岡本一〜三丁目）より出土したことが明らかなる点でも貴重である。主尊種子の下方に配される年月日の彫りは、種子や蓮台と比べ粗野な印象を受けるが、この時期の板碑にはま見られる傾向である。なお、区内伝存の板碑中、鎌倉時代の紀年を有すものは三〇基ほどを数える。また、区内で金剛界大日種子（パン）をもつ板碑は、貞治五年（一一三六）銘大日一尊種子板碑（松沢小学校蔵）と大日板碑断片（伝乗寺蔵）の三例が確認されているにすぎない。

38

### 阿弥陀三尊種子板碑

長祿二年（一二五八）  
緑泥片岩製  
高七三・五cm×幅三三・六cm×厚二・七cm



39

### 大日一尊種子板碑

弘安元年（一二七八）  
緑泥片岩製  
高七七・〇cm×幅三三・〇cm×厚三・一cm





#### 43 北条幻庵覚書

（永禄三年・一五六〇）  
縦二九・三cm×横一五五・二cm



伊勢新九郎（北条早雲）が小田原に城を構えて以来、徐々に勢力を拡大し、関東州をほぼその手中に収めることとなった後北条氏は、世田谷吉良氏が將軍家足利氏の一族であることを重視し、これを滅ぼすことなく平和的に懐柔しようと謀った。  
北条家二代の当主・氏綱は、その娘を、吉良頼康の夫人とした。頼康に実子があったことは、『快元僧都記』や『旧泉沢寺蔵阿弥陀佛像札銘』などから明らかであるが、成人しなかつたためか、その世継ぎには、氏綱のもう一人の娘・崎姫（山木大方・高源院）と堀越貞基の間にできた氏朝を迎えた。また、氏朝のもとにも前代に続き、北条家の娘（鶴松院・氏康の娘、一説に幻庵の娘とも）が嫁いでいる。

幻庵は北条早雲の第三子で、幼名を菊寿丸、通称を三郎といった。幼くして箱根権現別当金剛王院に入寺し、はじめの僧名を長綱と称したが、のち、臨済宗風に「幻庵宗哲」と改めた。「幻庵」が法号で、「宗哲」は法名である。

「幻庵覚書」は、一族の長老・北条幻庵が、吉良家へ嫁ぐ鶴松院に、奥方としての心得などを書き与えたものである。

その内容は姑・夫などへの仕え方から、婚礼の式法、諸人への対応、日常のたしなみなど、多岐にわたる。書体は女性に宛てたものであるため、平易な仮名書き文となっており、一つ書きで二十四ヶ条に及ぶ。また、署名も「そう哲」と一字、仮名書きにしている。戦国時代における東国武士の家庭生活をさまざまな方面よりうかがい知ることができる。文体が書簡体であるため、当時の東国の方言を知ることができ、国語資料としても貴重である。その発給年代については、文末に「十二月十六日」とあるのみで、それが何年の「十二月十六日」なのかを俄に判断することはできない。

しかし、明治三十四年（一九〇一）、『史学雑誌』第十二篇十一号に藤岡継平が「北条幻庵覚書の考」を発表し、「覚書」の作成年代を「永禄五年（一五六〇）に比定して以来、今日に至るまで、この「永禄五年作成説」が学会の通説となってきた。尤も、この藤岡説は、恐らく誤りであろうと考えられる。以下では、その根

ければならないのである。これにより、「覚書」の作成年代の下限を、永禄三年十二月二十六日とすることができ。

では、次にその上限について考えてみよう。このことについて藤岡は「覚書」中に「おたはら二御屋かた（『小田原二御屋形』）」という記載があることから、北条氏康が隠居して家督を氏政に譲ったとされる永禄三年以後の発給とする。この年、氏康は隠居して家督を氏政に譲り、萬松軒と称したことが『小田原記』などに見えるのである（『小田原記』では氏康の隠居を、永禄三年暮のこととし、『関八州古戦録』では、同年六月下旬としている）。つまり、「おたはら二御屋かた」という記載のある「覚書」の発給年代の上限は、どうあっても「永禄三年六月」を遡ることはないのである。

以上のことから、「覚書」にある「十二月十六日」という日付は、永禄三年の十二月十六日に限定できるのである。そして、鶴松院が嫁した永禄三年十二月から翌四年二月までの間に、吉良頼康は、家督を氏朝に譲った。そのことは、左掲の史料2に「如先代為不入進候」とあることから明らかである。氏朝の婚姻を機に、頼康は、家督を譲ったのであろう。

（史料2）  
知行方之儀、如先代為不入進候、於公私之内も別而頼母敷思召候間、可被守立事、専一候、我々若輩二候之間、如此候、粉骨尽就走廻者、弥々可引立候、為後日仍如件、  
永禄四辛酉年  
二月吉日

（花押）  
氏朝  
江戸彦五郎殿



拠となる史料を示し、新たな見解を示すこととした。

（史料1）  
深大寺・満願寺・泉沢寺・東岡寺・大徳寺・勝国寺・淨徳院、左七ヶ寺ハ如先々一向此分いろい不可有之候間、為後日態遣一札候、江戸・太平・高橋・周防・中治以下、何事も申かけ候者、此状可令見者也、仍而如件、  
永禄参年庚申  
十二月廿六日

（花押）  
頼康  
東岡寺  
七ヶ寺  
氏朝

右の史料は永禄三年（一五六〇）十二月二十六日に発給された「吉良頼康・同氏朝連署判物」である。その内容は、吉良氏ゆかりの寺院七ヶ寺に対し、旧来通りの保護を与えるというものであり、「江戸・大平・高橋・周防・中治以下」の者共が非儀を申し懸けてきた場合は、この文書を見せなさいといった内容になっている。「江戸」「大平」「高橋」「周防」「中治（地）」は、いずれも、当時、吉良家臣団の中核にあつた人たちと考えられる。

ここで、特に注意しておかなければならないのは「高橋」の存在である。この「高橋」は伊豆雲見の豪族・高橋郷左衛門に比定される。元々彼は北条氏の家臣であつたが、鶴松院が吉良氏朝に嫁した際（『北条幻庵覚書作成時』、供侍として世田谷に付き添い、以後、その縁で吉良家とも深い関わりをもつようになったと考えられる人物である。「覚書」には、

一 おとなしゆ、きんじゆ衆、御返れいのありやうハ、二両日すぎ候て、御ひきよういちうもんそへ、高はしかうさへもんを御たの三候て、つかはされ候へく候、

とあり、高橋郷左衛門が鶴松院のお側近くに仕え、引出物の差配などを任された様子が知られる。

つまり、高橋郷左衛門が、吉良家の中で重きをなすようになったのは、鶴松院入嫁を契機とするのである。したがって、「覚書」の作成年代は、高橋郷左衛門が吉良家の重臣とともにその名を連ねる史料1が発給された永禄三年十二月二十六日以前のことである。

#### 44 伝・北条幻庵作 一節切

長三三・四cm 径二・四cm

北条幻庵は、多才な人で、鞍、弓矢、茶臼、一節切などをつくることに長けていたという。『異本小田原記』には、

此頃は尺八を切り給ふ事名譽なり。幻庵切の尺八とて、一節切の尺八、都鄙に流浮し、禁中よりも御所望ありけり。依之（これに依り）尺八悉くはやり、小田原の若侍共、皆是をもてあそぶ。

とある。

本展示品は、幻庵夫妻の位牌所・金龍院（伊豆大平）の旧蔵品を幻庵の研究者として知られた故・立木望隆氏が知人より譲り受けたもの。立木氏によれば、北条氏綱の孫娘・香沼姫の末裔山本家に伝わる幻庵作の一節切とこの笛が瓜二つであるという。







①まんさい(万歳)  
烏帽子に大紋を着した太夫と鼓を持った才蔵とが、家々を廻って祝言をのべ、滑稽な掛け合いを演じる門付芸。江戸の正月は三河万歳の鼓の音で明けるといわれた程、人氣を博した。

②大かくら(大神楽)  
伊勢神宮に獅子舞などの曲芸を代理として奉納すると称したところから、代(大)神楽と呼ばれた。代神楽は伊勢より生じたといわれるが、尾張熱田の大神楽などもあった。



③さるまはし(猿廻し)  
猿に曲芸をさせる大道芸。縁起物の一つとして正月に廻ることが多く、武家では馬の病気を防ぐという俗言を信じて厩で演じさせたりもしたという。



④大こくまひ(大黒舞)  
大黒天の面と頭巾を着けた遊芸人が打出の小槌を持ち、門ごとに立ち、祝いの詞を述べながら舞う門付芸。

⑤はるこま(春駒)  
新春に馬の飾り物を身に付け、歌い舞う門付芸。新春に馬を見ると、年中の厄を除けるという中国の故事にもとづき、宮中では、古くから白馬節会あまのまのせがひがおこなわれていた。春駒は民間でこれを模したものとされる。



⑥つちだんぎ(辻談義)  
もともと、僧侶が、往来で平易に仏の道を説き、喜捨を受けるものであるが、それを真似、僧形で滑稽談義を語り、投げ銭を得るものが現れた。大傘をさすのが当時の決まりであった。



⑦おとりねんぶつ(踊り念仏)  
鼓・鉦などの拍子にあわせて念仏を唱えながら踊るもの。空也上人が始め、一遍上人の時宗で盛んになったとされる。

⑧かしまおとり(鹿島踊り)  
鹿島大明神の神人の姿で歌い踊って、米や銭をもらい歩く門付芸。本来、鹿島神宮の神人がこと触れの際に舞ったものであるが、のち、これを真似た者が多く現れた。







70

岡本黄石喜寿肖像画

明治二十年（一八八七）

野口小蘋筆

絹本著色

縦一一・二cm×横四二・九cm

黄石七十七歳の寿像。作者は明治画壇を代表する閨秀画家・野口小蘋。岡本黄石は小蘋の漢詩の師である。署名にある「親」は小蘋の名、「松郎」はその旧姓。

『黄石齋集』第四集下巻二には「明治九年（一八七四）立秋後一日晩涼、移榻於中庭、小蘋女史適至、对座賦示」と記されている。これが同書における小蘋の名の初見である。この前年の七月、黄石は維新後はじめて上京し、当時麹町にあった日下部鳴鶴邸に客居していた。

マクリの状態のまま宇津木家に伝来した本作品の上部には広い余白がある。この余白に黄石自身が賛を添え、贈答用にするとつもりだったのであろう。『岡本黄石略伝』には、

庶昌（清国公使・黎庶昌）ノ請ニ依リ野口小蘋画ク所ノ

肖像ニ自賛ヲ題シテ之ヲ贈ル、

とあり、本作品以外にも小蘋が贈答用の黄石肖像画を描いていたことが知られる。

野口小蘋《のぐちしょうひん》弘化四年（一八四七）〜大正六年（一九一七）。徳島の医師・松村春岱の娘として大坂に生まれた。慶応元年（一八六五）、日根野対山の門に入り、画を習う。同三年、京都移住。更に明治四年（一八七二）上京。同六年、官命により皇后宮御寢殿のための花卉図を描く。二十二年、華族女学校教授となった。また、三十七年には、女性として初めて帝室技芸員に任官されている。

71

模写「華山筆売茶翁肖像」

明治十七年（一八八四）

渡辺小華筆

絹本著色

縦一一・六cm×横四三・一cm

天保八年二月、黄石の実兄・宇津木静区（諱は竣。通称を矩之允という）が、その師・大塩平八郎の意を受けた門弟たちによって殺害されるという事件が起きた。齢わずか六歳にして越前国南条郡今庄村へ養子に遣られた二歳違いの兄・静区は、十七歳の時、期するところあって養家を去り、学問の道を志すこととなった。貧困と苦学の末、彼が生涯の師に選んだのが大坂

の陽明学者・大塩平八郎であった。静区は、数年間大坂で学んだ後、長崎に遊学したが、大塩平八郎の前年、長崎から戻り、再び師の許に身を寄せていた。事前に平八郎の計画をうち明けたところ、「日頃の言動に似合わぬ軽率である。」と静区に諫められた大塩は、これを亡き者にしようと謀ったのである。天保八年二月十九日、平八郎の日の朝、大塩の意を受けた門弟・大井正一郎ら数名の大塩門弟たちに静区は襲われ、二十九歳の短い人生を終えた。この年五月、渡辺華山がその門人・福田半香を介して黄石に面会を求めてきた。静区危難一件の顛末を聴くためである。同月、黄石はその役邸へ華山を招いた。面談は七ツ時より薄暮に至ったという。数日後、華山から黄石の許へ売茶翁図が贈られた。会談中、酒を一切口にせず、茶を啜っていた黄石の姿を見て売茶翁を描いて贈ろうと思いついたのであった。華山来訪の翌月、黄石は江戸詰の任を終え、国許へ帰っている。

華山が描いたこの売茶翁図は、のちに文人の間で評判となり、買い取りの申し出が引きも切らなかつたという。しかし、黄石は生涯この絵を手放さなかつた。本模写は、華山の子・小華（略歴は178頁参照）が明治十七年に国井某の依頼を受けて描いたものと推定される。その折に黄石所有の売茶翁図を参考のため借り受けた旨認められた小華の手紙が佐野市歴史博物館の須永文庫に遺されている。一方、華山が画いた原本の方は、黄石の死後しばらく同家の蔵するところであったが（少なくとも大正十二年まで同家にあったことが宇津木家文書によって確認されている）、のち、青森五所川原の豪商・佐々木嘉太郎の所持するところとなった。ところが、昭和十九年の火災で、その収集品の殆どが焼失し、この時、件の売茶翁図も多くの収集品とともに灰燼に帰したものと考えられている。





90

草書一行書「春江曉帶白雲流」

江戸時代

龍草廬筆

紙本墨書

縦一三・〇cm×横二七・九cm

春江曉帶白雲流

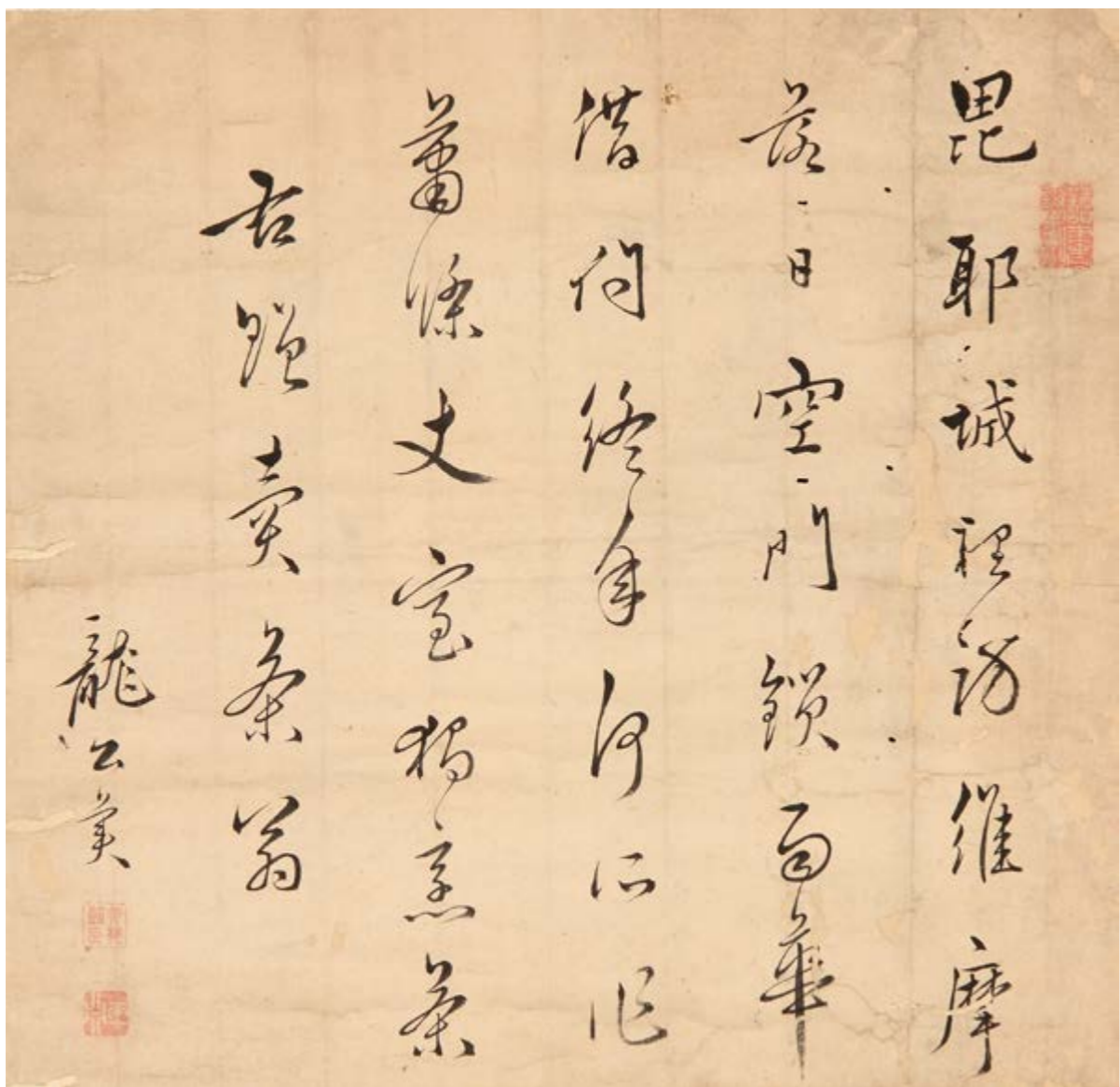
草廬龍公美

【訓読】  
春江曉に白雲を帯びて流る

【出典】

元・王蒙七言律詩「閻適」

「明樹遠浮青嶂出、春江曉帶白雲流」



91

草書七言絶句「贈売茶翁」

龍草廬筆

紙本墨書

縦三七・一cm×横三八・二cm

毘耶城裡訪維摩

落日空門鎖雨華

借問終年何所作

蕭条丈室独烹茶

右贈売茶翁

龍公美

【訓読】

毘耶城裡 維摩を訪ね

落日の空門 雨華に鎖さる

借問す 終年 何の作す所ぞ

蕭条たる丈室 独り茶を烹る

右売茶翁に贈る

本作品は、彦根藩の儒臣を長く勤め、晩年を京都の鴨川河畔で過ごした龍草廬が売茶翁高遊外（一六七五～一七六三）のために賦して贈った自作の詩を流麗な草書で揮毫したものである。売茶翁は、黄檗宗の僧侶で、我が国煎茶道の始祖と目される人物である。禪と茶道の墮落を批判して六十の歳から京都で茶を売って暮らした。





118

鶉に茄子図

佐竹永海筆

絹本着色

縦六七・二cm×横四九・六cm

佐竹永海《さたけえいかい》享和三年（一八〇三）〜明治七年（一八七四）。会津若松北小路町の時絵師の家に生まれた。通称衛司。また、雪村周繼の後裔を称したので、字を周村といい（別名に篤敬）名を愛雪とつけた。号には、永海のほか、盤玉、雪梅、愛雪楼、壤々斎、九成堂・天水などがある。幼少より絵を好み、はじめ、会津若松の町絵師・萩原盤山に師事し、盤玉と号した。二十歳の頃、江戸に出て、谷文晁の画塾・写山楼に入門。文晁のもとで研鑽を積み、一家を成すに至った。また、天保九年（一八三八）三十六歳のとき、文晁の推挙により、彦根藩の御用

絵師となった。それから十七年後の安政二年（一八五五）、上野寛永寺の子院・覚成院かくじょういんにおいて、得度。この時、同院より法橋位を授かったと考えられる。また、同五年頃には、法眼位を得ている。これも、覚成院から付与されたものであろう。

因みに、明治三年（一八九〇）には、大場代官屋敷内書院違棚の天袋の襖に富士の画を描いている。当時の御用絵師たちは、和漢両様の絵が描けることを需められたので、そのいずれにも巧みな者にしか、御用は勤まらなかった。彦根藩の御用を勤めた永海も、やはり、その多分に洩れず、和漢両様の絵を能くした。

119

桃に寿帯鳥図

佐竹永海筆

絹本着色

縦一三三・二cm×横四一・〇cm



寿帯鳥は、体長三〇cmほどの小禽で、別名サンコウチョウ、尾長ヒタキなどという。美しい羽の色と長い二本の尾羽が特徴。同じ花鳥画でも、南蘋風の本作品と大和絵風の118とは大きく趣を異にする。並べて見比べるのも一興であろう。





139  
伊勢貞丈肖像  
江戸時代後期（天保頃）  
溪斎英泉筆  
木版多色刷  
縦三八・〇cm×横二四・六cm

この画の筆者・溪斎英泉が浮世絵師として活動し始めるのは、伊勢貞丈が他界した天明四年（二七八四）より三〇年程降った文化年間である。本作品は貞丈の子孫がその年忌追善に際し、家蔵の肖像画を版画にして法要参列者へ配るため、溪斎英泉に注文したものと考えられる。作成年代は不明であるが、貞丈の五〇回忌に当たる天保四年が有力であろう。

伊勢貞丈《いせ ていじょう》享保二年（一七一七）〜天明四年（二七八四）。江戸時代を代表する故実有職家として知られる。その出自は伊勢平氏である。伊勢氏は室町時代、幕府の政所執事を勤めた家柄で殿中の礼法故実を伝えて伊勢流と称した。室町幕府滅亡後は伊勢氏も衰微したが、寛永十四年（一六三七）貞丈の曾祖父・貞衡が名家の末裔として幕府に召し出された。享保十一年（一七二六）に兄・貞陳が天逝したため、名家・伊勢氏の絶えることを惜しんだ幕府が同年貞丈に三〇〇石の知行地を与え、その名跡を継がせた。天明四年死去。芝の大養寺に葬られる。のち、大吉寺（世田谷一七一九）に改葬。

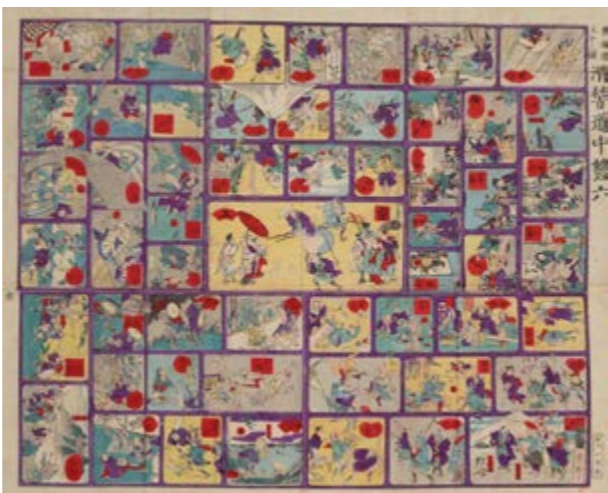
溪斎英泉《けいさい えいせん》寛政三年（一七九一）〜嘉永元年（一八四八）。幼時、画を狩野白珪齋から学び、一時、安房北条藩に仕官したと伝えられる。のち、浮世絵師を志して菊川英山の門人となる。為永春水・曲亭馬琴らが上梓した戯作本などの挿絵を手掛け、文政年間半ば頃には流行絵師となった。

140

東海道五十三駅

滑稽道中双六

作者不詳・小泉兼刻  
木版多色刷  
縦五六・二cm×横六九・〇cm



142

参宮上京道中一覽双六

安政四年（一八五七）  
歌川広重筆・葛屋吉蔵板  
木版多色刷  
縦七二・五cm×横七一・五cm

江戸時代、どんな村にも必ず伊勢講があった。伊勢講とは、伊勢へ行く旅費を講金として積み立て、籤に当たった者が、代表して伊勢神宮に参詣し、霊験を受けて帰るといふものである。代参の者が神宮に詣る際は、必ず太々神楽を奉納するので、伊勢講のことを太々講ともいった。

141

江戸名所一覽双六

歌川広重（二代）筆・葛屋吉蔵板  
木版多色刷  
縦七二・九cm×横七二・五cm



鵜形蕙齋の「江戸一目図」を真似た江戸市中およびその近郊の名所案内図を双六仕立てにしたもの。世田谷では、北沢の牡丹園（203頁参照）が載っている。

